

---

# ズミエイ

銀流香炎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ズミエイ

### 【Zコード】

Z9252A

### 【作者名】

銀流香炎

### 【あらすじ】

かつて、一人の龍の娘と親愛を誓つた魔法使いがいた。しかしそれは、双方にとつて最悪の事態を招くこととなる。自然体で生きていたい龍族に比べて、人間は欲深すぎたのだ。龍の恨みは募り、件の少女と魔法使いが心通わせたのを皮切りに大戦争が勃発した。長きに渡る戦争。怯えながら生きる人間たちの中で、魔法使いは若い命を散らした。裁きがくだり……その少女の行方もまた、誰一人知ることなく時代が変わり、世代が変わつて語られなくなつたという。

## 序章

遙か古えより、数多い呼称で親しまれてきた龍族。

ウインドホグラー（風龍）、ウルローキ（火龍）、ニアレンティル（水龍）、ヨルズドラカ（地龍）。

それらを総じて【ズミヒイ】といつ。

海の上空では強い風が吹いていた。暗雲たち込める空を見上げて、はらはらと少女は涙を流す。

（もう逃げられないといつの？　この運命から）

海際の断崖に追い詰められた少女の紺碧の髪が、強すぎる潮風に波形を描いて躍っていた。

「呪われてあれ！ 我らが掟を破りしエアレンティルの娘よ」

龍族の長老、地龍の喉から怒声が轟いた。

少女は悲鳴を上げてその場に膝をつく、余りの恐ろしさに眩暈を催したのだ。

「龍でありながら、何故我らを狩る人間を助けたのだ！」

少女は全身に突き刺さる怒りに耐えながら、きつく唇を噛み締める。

「警え、我らに仇成す存在であれ… 同じ命です、目の前で苦しんでいる者を捨て置く事はできません」

「人間など助けおつて、そうして我らの数が減つていいくのだ！」

「確かに私たちを狩る人間は憎い… けれど人間の総てが悪ではないと思うのです」

「戯言を……」

長老のヨルズドラカは、皺深い顔を更に皺にして酷薄な笑みを浮かべた。

それは、明らかな嘲笑。

「撻破りのそなたに、似合いの裁きを下してやる」

どうして、一人の人間を助けただけで裁かれなければいけないのだろうか？

どんな存在であろうと、命は秤にかけてはいけないのに。

後じさつた少女は絶望の眼差しで長老を見つめる。

「なぜ、なぜです…命になんの違いがあるというんですか」

「呪われしエアレンデイルの娘よ…命尽きるその時までそなたは真名を明かすことを禁ずるー」

つち震える少女に、更に追い撃ちをかけるようにヨルズドラカは呪いをかけた。

地を這う呪いに、少女は駆け出す。

うねるようすに拡がる呪いの連鎖、それは毒の刺を持つ茨だ。

刺されたら最後、たとえ龍であるようと無事では済まないだろ？

呪いは大地の属性を持つもの。

それならば、地面がきれる場所へ行けばいい。

少女の足は塵を蹴った。

「愚か者……そこに組成するものがなくとも儂の薦は切れぬ」

地龍の放った薦が少女を捕らえた。しかし彼女とて易々と捕まっているわけではない。

彼女の身体を包んでいる水が、壁を作つて薦を阻んでいた。

「水よ……我が名に於いて呪ずる。我を守り固めよ」

「やめろ……そなた死ぬ氣か?！」

身体を包み込む水の中で、彼女の姿が淡く光を帯びる。持ちえる総ての力を集めているのだ。

つむしたえる地龍を横目で追いながら、エアレン・ディル最後の少女は悲しげに微笑んだ。

「長老様、貴男を恨みはしません。でもせめて……私の存在だけは伝えてください、この先の未来のためにも」

少女を包む水が、ジワジワと凍り付いていく。

愛する魔法使いの眠る丘の上で彼女もまた、自らを氷の中に封じ込めて眠った。

できるなら、永遠に目覚めることがないようにとひそかに願いながら……。

龍と人間は、断絶した世界に生きるもの。

協力を求められれば、それに応えるだけの付き合い。それが当然の掟だ。

誓いなくして協力することは大罪に値する。

かつて、人間との共存を夢見た一人の娘がいたといつ。

もう一つの物か解らないほど古い書物の一節だ。

だが彼女が何を思い、伝えようとしていたのかの真実は理解される事なく景色はうつろい、人も龍も世代が替わっていきそれから一千年が過ぎた。

その真実を知るのは、今は古森となっている丘に眠る者と、彼女自身しかいない。

## 謎解き（前書き）

かつて龍の娘と親愛を誓つた、『大賢者』と讃えられた魔法使いがいた。

それから幾星霜が過ぎ去り……彼の歴史は、彼の血を汲むとある魔法使いの許に残されたのみとなっていた。

【西の森に、我が全靈を以て　　を封印す】

彼の血を汲む、国一番の魔法使いである少年の旅が今幕を開ける！

かつて、龍の娘と親愛を誓つた魔法使いがいた。

彼の歴史は数えるほどしか現存しておらず、最後の一冊は現在、とある若い魔法使いの元にある。

大賢者と讃えられた男を祖に持つ少年は、憂鬱そうに古ぼけた羊皮紙のページをめくつっていた。

長い睫毛に縁取られた目は一重で、顔立ちは春の女神を思わず程に美しい。

彼の名はリエト、この世界・エスキルーの魔法使いである。リエトは不機嫌全開でソファに本を投げ付けた。

「つたく……なにが秘書なんだ。こんなただの謎解きじゃないか

### 【西の古森に 我が全靈の技に於いて 此処に を封印す】

所々に消え薄れている文章は、そこで途切れていた。

「封印ってなんだ? ……ちゃんとそこを書いとけばいいのに」

リエトは流麗な顔をしかめて、虚ろに拡がる白い天を見あげた。リエトの部屋の窓からは街の中心部が見える。

活気溢れる広場。

そしてそれを囲む商店街の屋根。

雨降りなのにも関わらず、活気は衰えなく街を震わせていた。

「やれやれ、雨降りなのに陽気なもんだよ……なあ、リリア」

「キキユッ、キッ」

リエトは、窓辺で毛繕いをしている白鼠を抓みあげた。

「もう……機嫌が悪いからつて、あたしに当たらないで頂戴」

白鼠は身軽くリエトの掌から飛び降りると、少女の形に姿を変える。彼女はリエトに初めて造られた使い魔で、名前をリリアといつ。

普段は鼠だが、主の傍だけでは「うして銀の髪に、青い瞳をした少女の形をとつてゐるのだ。

「退屈も退屈……最近の世の中は楽しみが少ないんだよ」

「あひ、リエトにしてはしおらしい。なら楽しみを作ればいいでしょ？」

亞麻色の髪を撫で付けて、リリアはげんなりと頃垂れる主の肩に緑色のベルベットでできた肩掛けを着せてやつた。

「ありがとうございますリリア……悪いけど少し出でてくるよ

「まあ……今お茶を淹れようと思いましたのに」

残念そうに指をくわえたリリアの髪にキスをして、リエトは静かな笑みをなげる。

「ごめんよ、リリア」

「い、いいえ

そつとりリアの頬が紅潮した。

リエトは温[室]の扉を開けて螺旋階段を昇ると、屋根に立ち両手を広げた。

柔らかな雨が、リエトの亞麻色の髪を濡らしていく。

雨に濡れた横顔はどこか淋しげで、夕暮れの影を纏つ彼の存在を際立たせていた。

リエトの手首から黒い羽毛が盛り上がると、それはあつとこゝ間に彼の両腕を翼に変える。

何度も羽ばたくうちに、彼は完全に大きな鴉になつていた。

「西の古森……確かに海際だつたな」

雨を裂く翼が音もなく旋回して、灯台の天辺を通り過ぎる。  
秋も終わりの天候だ。雨で灰色の空からは、雨ではなく雪片が降り始めていた。

鴉はようやく古森の上空に到達すると、舒にその姿を変える。

「やはり……これは声か……」

リエトは吹き荒れる風の中に、微かな歌うような声を聞いた。

「だれ……だれ？ とても懐かしい気配」

「だから聞こえるのかも解らない筈なのに、リエトは声に向かって確かな足取りで歩き始めた。

「これだ、この声だ……いつも夢現の中で俺を呼んでいたのは、ひんやりとした空気が包む針葉樹の森を、リエトはまくわくと進んでいった。

歩くにつれて、次第に声が近くなる。

「ソウエル？ ソウエルなの？ いえ、違うわ…彼はもう…。ここにいる、貴方は誰？」

ソウエルという名に覚えはないが、リエトは相手を怖がらせないよう抑え気味の声で問い掛けた。

「俺はリエトという、魔法使いだ。君は誰だい？」

「あたしに……名前はないの」

少し戸惑いをみせた後、少女と思しき声は悲しそうに小さく掠れた。  
「どうしてなんだ？ 君を怖がらせね」とはしないよ……

リエトは、声がする度に伝わってくる魔法の息吹に眉間にしかめた。とても古く、強い魔法の息吹を感じたのだ。

それに、濃厚に染み付いた昏い悪意。

「あたしを、見つけて」

啜り泣きの混じった声が森を廻り、ざわめきを拡げた。

「必ず見つけてやるから、今は泣くんじゃない」

ざわめきは、耳を狂わすノイズ。

恐らくは、彼女の不安が作用しているんだろう。

リエトはまた歩き出す。

息吹を廻り、一番強い気配の元を探ろうとしているのだ。

「これは水か……」

堅固な悲しみの塊。

それに伴つ凍てつく寒さ。

そして『なにか』。

(巨大で、蒼い……?)

一瞬間だけ、脳裏にフラッシュして掴めた気配。

だがそれさえも微量で、おおよそ謎解きに役立つものではないようだった。

何なんだろう……。

強い魔力の息吹は感じられるのに、本体の気配が感じられないのは何故だらう。

「君は……ウイザードなのか?」

「……それに似てる」

間を置いて返ってきた返事が、どこか嬉しそうでリヒトは片眉を跳ね上げる。

「誰に閉じ込められたんだ?」

問い合わせるが、少女は答えない。

どうやら、それは答えたくないようだ。

小雪を含んだ風が、さわさわとリヒトの亞麻色の髪を撫で付けた。

「教えてくれないか、君はこの森のどこにいるんだい?」

「……じゃあ、謎を解いて」

「謎解き……か。いいよ」

「水の卵、最果てにて凍る。我、そこに眠る者なり」「最果て……?」

ヒィィィ

…

これは風だらうか。

日没間近の森が、まるで幽鬼の啜り泣きのよつた薄氣味悪い騒めき

すす

を拡げていく。

リエトの頬に、鋭い北風が体当たりして噛つた。

それはまるで、そんなものは不可能だと嘲笑つかのようだった。

「必ずそこから出す。とりあえずまた来るよ」

（これは太古の呪法だ……。それもひどく難解な）

凍みた頬を撫でてから、リエトは鳥になり森を飛び去っていった。

「果たして……貴方には見つけられる？」

今まで沢山の魔法使いがこの森を訪れたが、誰も自分を見つけるまでには至らなかつたのだ。

「願わくば……願わくばもう一度……」

もう一度、魔法使いと共に旅をしてみたい。

リエトが去つた後の森で、少女は小さくつぶやいて再び眠りに落ちていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9252a/>

---

ズミエイ

2010年11月23日17時09分発行